

第3章 大規模イチゴ栽培の実際

1. 大規模なイチゴ栽培を検討されている方へ

近年、農業以外の分野の企業がイチゴ栽培に取り組む事例が多くみられる。本章ではそのような状況を前提に、イチゴ栽培を経験したことのない人が、新規参入でイチゴの大規模な生産を開始するにあたって確認しておかなければならないことや、実際の成功例を参考に、企業的経営を成功させるために必要な要素について述べる。

1) イチゴの基礎知識

日本での大半のイチゴ栽培は「促成作型」という栽培体系に分類される。一般的なイチゴは「一季成り性」と呼ばれる性質を持ち、日の短さや気温の低下から秋の到来を察知して花芽をつける。自然条件では冬を越して春になって花を咲かせるが、促成作型では秋から花を咲かせて初冬から春にわたって長期間果実を収穫する。これとは別に夏に果実を収穫する作型もあり、それに適した「四季成り性」の品種もあるが、温暖地で営利生産を成功させるのは非常に難易度が高い。

通常のイチゴは「ランナー」と呼ばれる栄養繁殖器官を用いて行われる。そのため本圃面積の3割程度の広い育苗施設が必要となる。また、収穫と出荷に多大な労力がかかり、労働時間が季節によって大きく変動することも特徴である。

2) 大規模な栽培事例から学ぶ注意点と成功の条件(箇条書き)

- ・立地は冬場の日照、労働力の確保、物流などを考慮
- ・まず大切なのは土地、水、人間関係。土地はなかなか貸してはもらえない
- ・施設はなるべく安くしたいが採光、換気、耐風には十分な配慮を
- ・被覆資材の張り替えはかなりの負担
- ・夏のイチゴへの需要は根強いが高単価に惑わされると危険。高いのには訳がある
- ・一般的に行われている促成栽培でも高い収益を得ることは容易ではないことを覚悟する
- ・苗を自家生産するのであれば広い育苗施設が必要
- ・雇用が前提なら高コストだが高設栽培はやむを得ない
- ・労働時間が季節で大きく変動。周年雇用のためにはその変動に対応できるようにする
- ・収穫と出荷に労働が集中。収穫の多い3~4月は多忙を極める
- ・収穫期だけの雇用やパック詰め的外部委託の検討を。観光農園化で対応例も
- ・忙しくない時期は農作業の受託や他作物の栽培などで労力を有効活用
- ・現場のリーダーは長期間にわたって自分でモチベーションを維持できる人
- ・農場で起こる問題にいつでも対応できる人が必要
- ・果実をそのまま食べるという特徴に注意する
- ・授粉には蜂などの昆虫が使用される。殺虫剤の使用には十分な配慮を
- ・農薬を使わない栽培はまだほとんど無理。技術の開発は将来の課題
- ・輸出にあたっては残留農薬に注意。基準は国によって異なる
- ・生産性は、光や温度などの環境条件、肥料、水、手入れ、病害虫管理など全ての要素の中の最も劣悪な水準に制限されてしまう
- ・植物に対しては工学的な考え方が通用しない場面が多々ある
- ・市場に対する発言力を増すには協調して生産が行える仲間が多いことが有利。他のイチゴ生産組織はライバルではなく仲間。協調体制構築の工夫を
- ・人工光での栽培では、強い光をどう安く調達するかが鍵。電気代が経費の中で大きなウエイトを占める
- ・栽培技術についての情報は多くあるが、実際に植物を触らないと理解しにくい。小規模でもまず栽培してみる
- ・運転開始前に最低1年は栽培経験が必要。研修などに行くと良い
- ・植物栽培の未経験者はイチゴに限らず何か植物を栽培するとよい
- ・高い栽培技術を持った人からの技術指導は問題解決の早道

(今村 仁＝農研機構)

参考文献

- 1) 施山紀男(2010). 日本のイチゴ. 養賢堂 (案内:少し難しいが学術的で正確)
- 2) 伏原肇(2005). 増補改訂イチゴの作業便利帳. 農文協 (案内:栽培で何をすべきで何をしてはいけないか明確)



図 大規模イチゴ栽培施設(大分県)